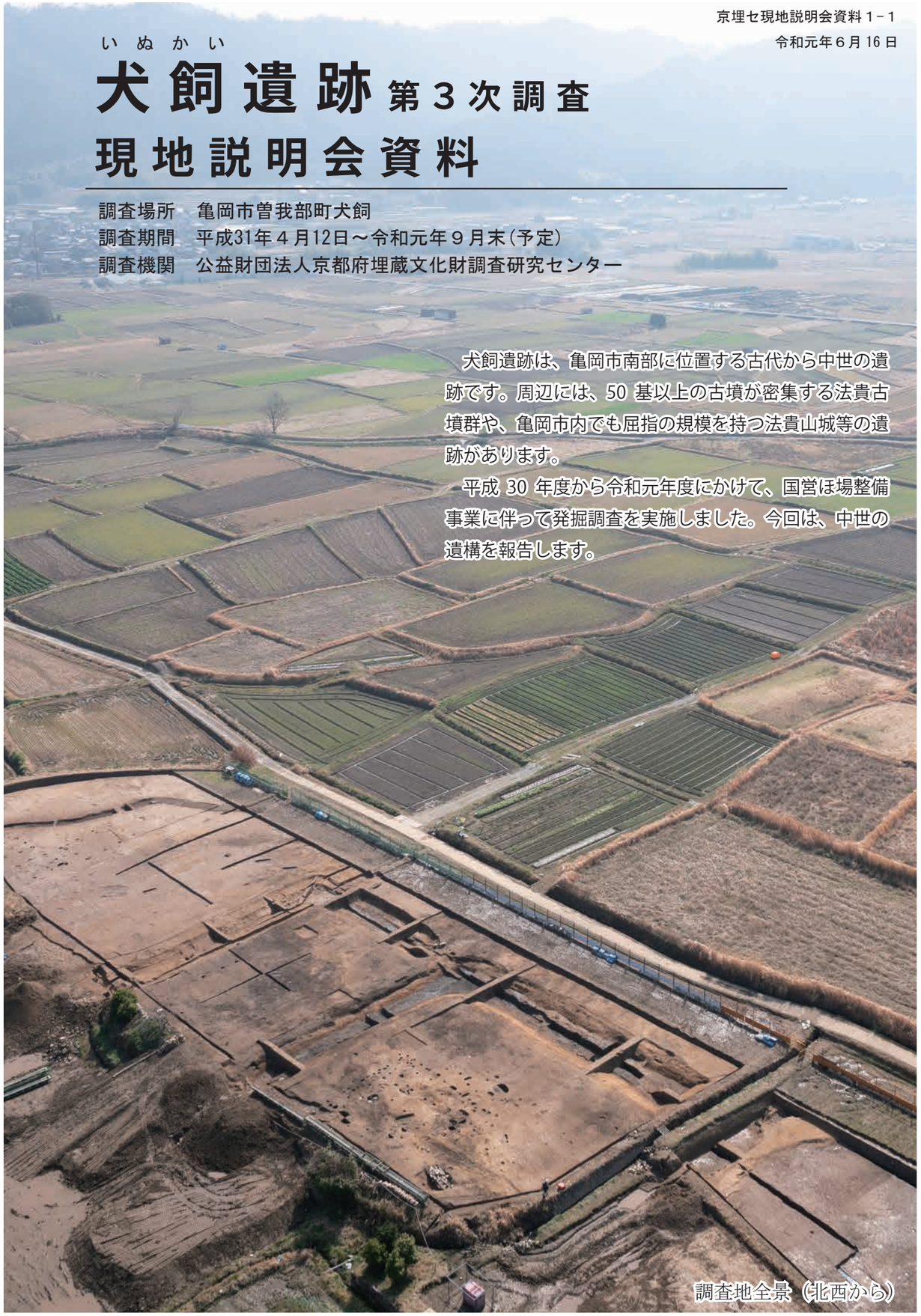
犬飼（いぬかい）遺跡 第３次調査
現地説明会資料

調査場所　亀岡市曽我部町犬飼
調査期間　平成31年４月12日～令和元年９月末（予定）
調査機関　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

犬飼遺跡は、亀岡市南部に位置する古代から中世の遺跡です。周辺には、50 基以上の古墳が密集する法貴古墳群や、亀岡市内でも屈指の規模を持つ法貴山城等の遺跡があります。

平成 30 年度から令和元年度にかけて、国営ほ場整備事業に伴って発掘調査を実施しました。今回は、中世の遺構を報告します。



調査地全景（北西から）

【まとめ】

今回の調査では、巨大な堀で囲まれた「方形居館」を検出しました。出土した遺物から、13 世紀後半～14 世紀前半に機能していた居館であることが分かりました。

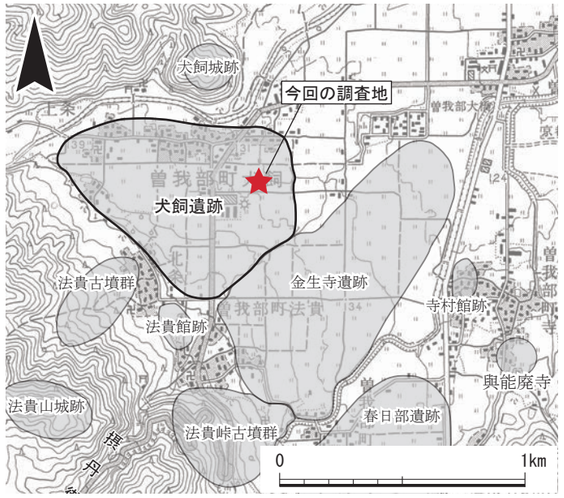
第３図は、鎌倉時代の絵巻に描かれた武士の居館の様子です。このような堀で囲まれた屋敷は、武士の居館の典型例であると考えられています。今回見つかった居館は、文献史料には記されていないため、実際にどのような人物が住んでいたのかは明らかではありません。

しかし、堀の規模が巨大であること、中国製の陶磁器や漆器椀などの高級食器が出土していることから考えると、有力者が居住していたとみて間違いないでしょう。

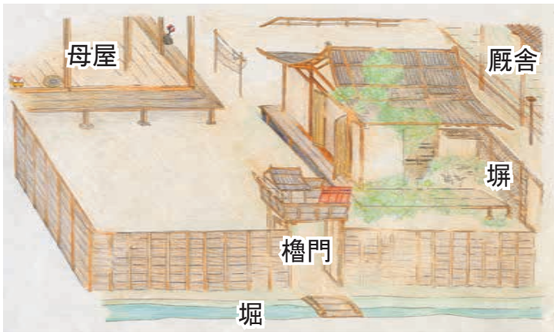
これまで、亀岡盆地では中世の方形居館は春日部（かすかべ）遺跡などで見つかっていましたが、いずれも一部が見つかっていたのみでした。今回のように、堀と区画の内部を含め、全体を調査した事例は、全国的にみても珍しいといえます。

今回の犬飼遺跡の調査成果は、今後、中世の社会を考える上では貴重な資料となるでしょう。

最後になりましたが、発掘調査にご参加いただいた皆様、ご指導、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。



第２図　調査地と周辺の主な遺跡（1/25,000 法貴）

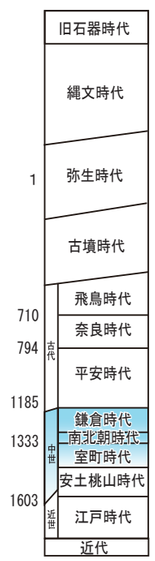


第３図　絵巻物に描かれた武家の居館
（一遍上人絵伝を参考に作成）

亀岡盆地の中世 主なできごと

犬飼遺跡の時代

1284（弘安四）	穴生（穴太）寺に一遍上人が来られる
1333（元弘三）	足利尊氏、篠村八幡宮にて鎌倉幕府を討つため挙兵
1336（建武三）	〃　篠村八幡宮に対し丹波国佐伯荘地頭職を寄付
1351（観応二）	丹波守護代内藤定光、観応の擾乱に乗じて吉富荘に侵入
1391（明徳二）	細川頼元、丹波国守護職に任命される
	（以降戦国末期まで、丹波国は細川氏の領国である）
1467（応仁元）	福知氏が犬飼城を築城



公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3
http//www.kyotofu-maibun.or.jp

調査の概要～方形居館の発見～

今回の調査では、13 世紀後半～ 14 世紀前半（鎌倉時代の終わりから南北朝時代）につくられた居館が見つかりました。今回見つかった居館は、巨大な堀で東西２か所に区画されており、北側は崖を利用して敷地の境界としています。

このような、巨大な堀で区画された居館は、「方形館」「方形居館」などと呼ばれています。方形居館は、従来の研究から、武士の居館であったという説が有力です。

居館の構造

堀による区画の内側は、区画①が約 500 ㎡、区画②が約 350 ㎡の広さがあります。それぞれの区画では母屋と小さな建物が１棟ずつ見つかりましたが、柱の並び方や太さ、建物の内部構造に違いがあります。区画①の母屋は、細い柱が多く使用され、板張りの床を持つ住居が復元できます。それに対し、区画②の母屋は太くしっかりした柱を持ち、内部に広い「土間」のような空間がありました。そのため、区画①と②では建物の用途が異なっていたと考えられます。それぞれが独立した居住空間ではなく、一体のものであったのでしょう。

写真②　土橋検出状況

写真③　堀①の断面

写真①　調査地全景（上が北）

巨大な堀を検出

今回の調査では、３条の堀を検出しました。

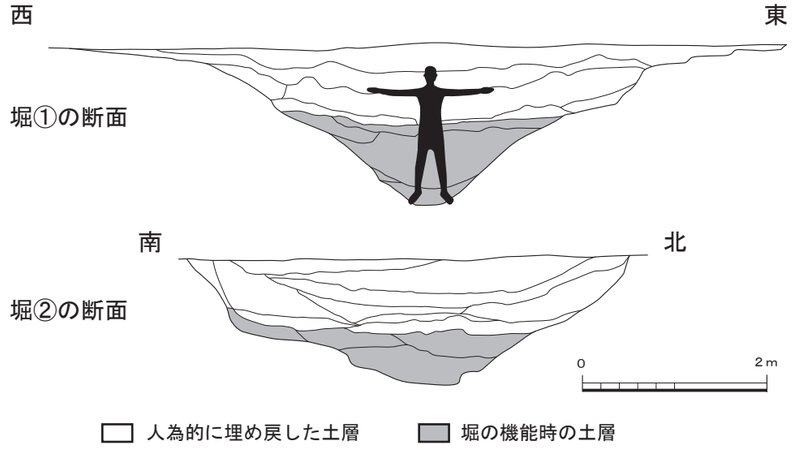
堀①は幅約８ｍの堀で、平面形状が逆「Ｌ」字状をしています。写真③のように、断面形状は「Ｖ」字状で、深さは最も深いところで約２ｍにもなります。堀の南西端には地山を削り残して土橋が構築されています。

堀の堆積状況から、上層は人為的に埋め戻された土であることが分かりました。下層には粘土が堆積しており、堀が機能していた時代には滞水があったと考えられます。この粘土層からは、写真⑥の漆器椀や草鞋などの、腐敗して残りにくい遺物が良好な状態で見つかりました。

堀②は幅約６ｍで平面形状が「Ｌ」字状をした堀です。一部は後世に削平を受けていましたが、最も深い部分は約 1.5ｍの深さがあります。堀の南西端には地山を削り残して土橋が構築されています。

堀③は、区画①の西側を区画する堀です。全形はわかりませんが、調査区の北側に向かって伸びていたと考えられます。

なお、土塁の痕跡は確認されませんでした。そのため、屋敷地は第３図のように塀や生垣などで遮られていた可能性があります。



第１図　堀の断面図

貴重な遺物が多く出土

堀の中には、当時の生活道具が多く残されていました。瓦器椀や漆器椀、常滑や瀬戸で焼かれた壺などがあります。

中には、中国からもたらされた白磁や天目茶碗、緑釉陶器の「盤」と呼ばれる焼物も見つかりました。緑釉陶器の盤は、都では見つかっているものの、人々が簡単に入手できるものではありませんでした。

当時、この屋敷に住んでいた人物は高級な器を手にすることができるような有力者であったと考えられます。

写真④　瓦器椀
（日常用の器）

写真⑤
中国製の緑釉陶器

写真⑥　堀から出土した漆器椀